

た、山田光胤氏ほか漢方専門の方がたが、「癩」、「瘰」、「狂」の概念の変遷などについて追加してくださった。

司会の緒方富雄氏は江戸医学館における教育の実態について質問をくりかえされた。だが、その具体的なことはあまり解明されていないようである。この『癩癩狂辨』はそれをうかがわせる貴重な資料であることが、討論のなかで指摘された。なお、これはわたしたちの精神科医療史研究会が明治古典会で入手したもので、ほとんどの用紙は「医学館」とはいつている野紙である。今後各位の協力をえて、この内容の充分な解明に努力したい。

(自抄)

蘭医ポンペと日本

宮 永 孝

ポンペ書簡の多くは、出島のオランダ弁務官(ドンケル・クルチウス)とバタビアの総督に宛てて出したものから成っている。ポンペ書簡の現物はハーグの国立文書館にあり、またそれをマイクロフィルムにとったものが東大の史料編纂所にある。今回、解説できたのは、

- 一 一八五七年(安政四)の分が九通
 - 二 一八五八年(安政五)の分が十一通
 - 三 一八五九年(安政六)の分が十二通
- の、計三十二通である。

その他、ポンペがバタビアの「国立医薬貯蔵所」、S Rijks Med. gazin van Geneesmiddelen に宛てて出した、薬と医療品の注文書

も何通か解説できた。

ポンペが長崎を発ち、帰国の途についたのは、一八六二年(文久二)十二月一日(和暦九月十日)のことであるが、一八六〇年(万延元年)から一八六二年(文久二)十二月までの期間に出した書簡は、どこにあるのか見当らない。日本滞在中の最後の二カ年間は、閲読できなかった。

ポンペ書簡の中には、史料的な価値が高いものと、そうでないものがある。が、多少ともおもしろい内容のものだけについて述べてみる。

ポンペが長崎に着いたのは、一八五七年(安政四)九月二十一日の夜のことであるが、書簡から考察するとかれはすぐファン・デン・ブルック医師と交替しそのすまいに入ったわけではなかった。ポンペは一カ月以上も、ヤパン号(のちの威臨丸)の艦内で暮らさねばならなかったようである。

一八五七(安政四年)十月二十四日付の書簡は、ファン・デン・ブルックから薬や医薬品を引き継ぐことができたが書類のファイイルや手紙類は一切渡してもらえず、また住居も空けないので、難渋している旨を伝えたものである。

一八五八年(安政五)八月二十六日付の書簡は、アジア・コレラが発生したために、薬を多量に請求している。翌一八五九年(安政六)六月十日付の書簡の中では、シナの蛭(ひる)を五千三百びき購入して欲しい、と述べている。ポンペは「日本の蛭よりも、シナのそれの方が、体も大きく、よく血を吸う。長崎では日本の1/4の値段で購めることができる」といっている。

次は調査報告——。

長崎の人は Georg Indemann の名字を「早業活版師ゲ・インドマウル」とか「インドマウル」と呼んだ。インデルマウルは、わが国では単にオランダ印刷術を日本人に伝授した人として知られている。が、実はかれは第二次海軍派遣隊の看護兵でもあった。

「軍籍簿」によれば、一八三一年(天保二)九月二日、ユトレヒトに生まれた。歿年は不詳。一八五〇年四月二十七日——二等砲兵に任じられ、翌一八五一年八月十五日にいったん除隊。

一八五七年(安政四)二月六日——ロツテルダムにおいて三年契約で「看護兵」Naken oppasser として雇われ、ヤパン号に派遣された。バタビアまでカッテンディーケラ海軍派遣隊に同行したが、一行より一足おくれて来朝。

一八五七年(安政四)十一月一日から一八五九年(安政六)十二月一日まで日本に滞在した。記録にはただ「日本人に教えるために出島に滞在した」とある。長崎がコレラに襲われたとき、その撲滅に尽したが、ポンペはその功績をたたえ「かれが一層仕事に精を出すよう、またその功勞に対するほうびとして功勞賜金を出して下さるようお願いいたします」(一八五九年七月十日付、ドンケル・クルチウス宛書簡)と述べている。離日後、蘭領東インドに赴く。一八六〇年(万延元年)四月十五日——除隊。この年二十九歳。その後、どこで何をやり、どう暮らしたかについてはわからない。

長崎養生所の設計者トロイエン、ポンペ終えんの地に関して

は、またの機会にゆずります。

尾本涼海について

田崎 哲郎

尾本涼海について最初に記述したのは、長与専齋だった。『松香私志』(明治三五年、長与弥吉刊)に、適塾から長崎へ来た折、尾本宅に寄寓して、そこからポンペの講義を聞きに通った旨記している。同書附録の「旧大村藩種痘の話」では、嘉永二年(一八四九)モーニッケの牛痘種痘成功の報が大村につくと、尾本は専齋の妹等連れ、長崎へ向ったことが書いてある。

次に尾本に言及したのは山路弥吉(愛山)編『台山公事蹟』(大正九年、田川誠作刊)だった。大村藩主大村純瀨と尾本の関係に触れ、七頁余りの尾本の談話筆記も収めてある。ついで深川農堂『大村藩の医学』(昭和五年、同出版会)は、山路の著に加うるに尾本家を継いだ尾本安次郎の談話や当時まだ残っていた史料によって、尾本に一項を立てて記している。尾本は私の居住する豊橋の出であり、現存する若干の履歴なども参考に経歴を略述したい。

尾本家の医の初め、涼海の祖父喬(玄格)は三河国幡豆郡平坂(現西尾市)の郷土の子で、医を学び、後吉田(豊橋)で開業した。涼海はその孫で、公同ともいった。文政四年(一八二二)八月の生れである。

「天保七年(一八三六)丙申三月三河國田原藩鈴木春山ニ從テ始テ西洋醫學ヲ學フ」三年、同十年己亥東都ニ遊學シ、大槻俊